
薄れゆく意識の中で

れみどれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄れゆく意識の中で

【Nコード】

N3363M

【作者名】

れみどれ

【あらすじ】

とある国では、今は冬。湖べりの森の中の一件の小さな小屋
そこで過ごしている、目深帽子が特徴の男が居ました。

・・・彼の余命は後・・・僅か。

コンコン。

扉の奥から微かに轟く木の声

それに反応し、家……。いや小屋の中だと言うのに黒いコートを羽織る男は扉へと近づいて言った

近くにあったシルクハットを深く被り、扉を開ける

ギギ……。と見た目どおりの古い音がすると同時に小屋の中に風が流れこんだ

それと同時に、ストーブと思われる火が揺れた

「…………。道に迷いました」

そこに居たのは小さな少女

おそらく自分と同じ年ぐらいか？　そう感じた目深帽子の男はそうかい。

と素っ気無い返事をしたのだった

「で？　どこに行きたいんだ？」

木で出来た小屋。それが建っているのは小さな森の中だった

森は、風と天の漂白により真っ白に染まっていた

そんな辺境の中に住んでいる目深帽子も目深帽子だが、こんな所に迷い込むこの子もこの子だ

そう思っていた。見れば見るほど、この女の子は不思議だった

淡い紺のコート。肌は地に合わせたかの様な真っ白

……目が大きく開き、時々する瞬きが可愛い

「……………です」

「・・・え？　・・・ごめん。聞いていなかった」

彼女を見る事に夢中になっていた目深帽子は、話をまったく聞いていなかった

女の子は妙な表情をして、首をかしげた

それも止め、続けてさっきまで言っていたであろう事をもう一度言い始めた

「あの・・・こちらの方に・・・・・・で・・・・・・て・・・」

「（あ・・・れ・・・？）」

説明の途中途中で声が途切れて行く。

何だコレハ？　まさか・・・こんな時に・・・？

「（・・・ま・・・ず・・・い・・・）」

「・・・」

意識が完全に途切れた

目深帽子が覚えていたのは、彼女の可愛い瞬間が自分が目を閉じる前に何回もしていた事だけだった

不思議な事にそこから除ける、大きな瞳にはうつすらと涙すら見えた

・・・

木が小さく飛び散る、パチパチと言う音で目が覚めた
彼はコートのまま布団の中に入っていた
起き上がりあたりを見渡す
すると、木で出来た椅子に座って、テーブルに項垂れた形で寝てい
る先ほどの女の子の姿がそこにあったのだった

「・・・起きてくれ」

肩を揺らし、女の子を起こす
薄目を開け、彼女はゆっくりと体を起こした

「あ・・・れ。起きたんですか？」

起き立ての目を擦り、彼女は目深帽子をじっと見た
大丈夫・・・ですか？　そう目深帽子に向かって彼女は言う

「・・・僕は大丈夫だよ。・・・そんな事より君・・・もう帰っ
てくれないか？」

「・・・え？」

彼女を無理やり立たせて、扉を開けた
そして外へと追いやり、介抱してくれた事には感謝する。
ありがとう。　それだけを言って扉を閉めたのだった
その時、外ではチラチラ・・・きららと白い悲しみが降り注いでいた

「・・・駄目なんだ」

帽子を上から押さえ、今一度帽子を深く被る

目まですっぽりと隠れ、彼はそう呟いた

・これ以上あの子といたら、自分自身はあの子に恋をしてしまう
運命・恋・感情。 そんな言葉、今の彼は使いたくも無かった
が・彼は悟っていた。 自分自身が間違いなく彼女に惚れかかっ
ていた・と

だが、それは許されない事。 絶対に人に恋をしては行けない

「・・・駄目なんだ・・・絶対に」

もう一度、強く言い歯を食いしばった

胸のあたりを強く握って、彼はゆっくりと目を閉じた・・・

次の日の事だ

コンコン。 木の声がまた部屋に轟く

ドアを開けた目深帽子。 その先に居たのは、やはり彼女だった
悲しみを潰して、丸くする。

白い結晶が萃まって、二つの円が出来て笑顔となる。

そしてお手製の腕と着けて、彼女はそれを両手で持っていた

「・・・作ってみたの。 昨日は大丈夫？」

「・・・帰ってくれ」

「待つ・・・」

声の途中で扉を閉める

そして鍵を強く掛けた

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！

何回も心の中で復唱する

胸を締め付けるかのように、握り彼は目をつぶった

暫くし、目を開ける

すると扉の横にある、小さな窓には小さな影は映っていた

そこにあつたのは、彼女が持っていた白き結晶。

お団子二つに木のクシ二つさして、笑顔が出来る

悲しみですら、潰せば何にもならない。

次の日・・・また、戸が鳴った

彼はもう分かっていた

開けちゃだめだ。

自分にそう言い聞かせる

もしあの戸を開けてしまえば、僕はきつと・・・

駄目だ！ 駄目なんだ！ 絶対に！

目を瞑り、沈黙を自ら作って、時がただ流れるのを待つ

その時だった

木の奥から、細い音が響く

「・・・・・・・・貴方に会いたい」

「！！！！」

目をゆつくりと開ける

そして、扉の方を向いた。

その横には、なんと影が増えていた
・・・もうひとつ、もうひとつ結晶が増えていた
笑顔が二つになり、こちらを見つめる。

「・・・・・・・・」

目深帽子は扉をゆっくりと開けた
開けた先には、笑顔で自分を見つめる彼女が居たのだった
そして、その手にはマフラーがあった
ところどころ解れて、雑な所がある。　おそらく手縫いだろう

「・・・貴方に、作ってきたの。　部屋の中でもコートを着てるんだ
もの。　寒がり屋なんですよ？」

マフラーを差し出し、彼女はそう言った

「・・・ありがとう」

マフラーを受け取り、彼は彼女を見つめる
すると、今度はそのマフラーを彼女の首に巻きつけた

「君の方が寒そうだよ・・・」

相変わらず淡いコート一枚だった彼女の首をそれを巻きつけた

「・・・・・・・・。　ありがとう・・・。　寒がり屋さん」

笑って、彼女はそう答えた

自分の手を見る。　震えていた

確かに・・・強がり屋かもしれない。　彼はそう思った

でも、この震えは寒さなんかじゃない。

きっと、僕は駄目だと分かっているながら本心では喜んでいたのかも
しれない

彼女の温もりを

・・・逆に

この先に待っている、彼女の温もりの強さ

それを感じる必要が無くなる季節。 夏が怖かったのかも知れない

「結構狭い家だね・・・此処」

ある日彼女はそう言った

家、と言うのもいいのかどうか分からない

木々で出来た、この小屋。 彼が自ら進んでここに住んだのだ

「・・・風が気持ちいいんだよ。 此処は」

目深帽子がそう言う

そう・・・ と彼女が言う

もう幾らか建つたろう？ 彼女がこの家に住む様になってから

一ヶ月・・・二ヶ月。

彼女と初めて会ったあの日から、もうアレは起きていない

けど・・・もうそろそろだろう。

窓の外からのぞける二つの笑顔。それはまだ溶けてなかった

「・・・・・・・・ね？・・・・・・・・ちよつと・・・・・・・・てる・・・・・・・・って？」

「・・・・・・・・あ・・こ・・め・・」

もう察した

完全に、近づいているんだ

彼女の温もりが感じられない日が・・・・・・・・

目を閉じる。その時の最後に見えたのは、涙が浮かぶ彼女
あの時は・・・・・・・・きれいな瞬きだった

「・・・・・・・・起きた？」

目を開ける。自分の顔をのぞく女の子の姿が見えた
まず、笑顔を見せてくれた彼女
その後に、よかったあ・・・・・。とほっと息をつく
が、目深帽子の表情は暗いままだった
そして、決断した

「ねえ見て？」

太陽に近い、上枝に乗っている小さな雪
それを見て、まるで涙ね。と彼女は言った

「話って・・・何なの？」

そう彼女が切り出す。

彼は目を瞑って、息を吐いた

白い吐息が彼女の髪を静かに揺らす

その僅か一瞬と同時に数々の思い出が彼の中で揺れた

ねえねえ見て？ ご飯つくってみたの

なかなか晴れないね・・・

太陽がまぶしい・・・

「・・・僕は・・・もう・・・いなくなるんだ」

ゆっくりと口を開き、吐息と共に彼は言った

え・・・？ と大きな瞬きと同時に彼女が聞きなおす
もう一度、いなくなる・・・と小声で彼は呟いた

「どう・・・言う意味・・・？」

そう聞かれ、目深帽子はシルクハットを押した
そして、目を隠す

「・・・。。 重い病気・・・。 心臓を患っている」

「・・・。 ちょうど雪が溶け、花びらが咲き、そしてそれが青に変わる頃」

「僕はいなくなる」

帽子を強く押し、震えた声でそう言った

「だから・・・」

「もう・・・僕はキミに・・・会えない」

湖の浜辺。

冷え切った、冷水が波打ち、小さな二つの心を揺らす
黒いコートの中で、二人手をつなぐ

「山紫水明だ」

「ねえ・・・ここがいいね」

強く手を握り、目深帽子が言う

小さな顔を下へ向け、首を揺らす

了承の合図をすると、彼女は瞬きを何回もした
初めて惹かれた彼女の表情。

それが最後だと思つと、体が勝手に動いた

ポケットで結んだ優しさが解け、互いの肩を寄せ合つ

強く、強く彼女を目深帽子は抱いた

その時、彼女が小さな声で呟く

「・・・強がり屋さん」

目深帽子の体が小さく揺れ、息が揺れる

・・・涙が雪へと零れ落ち、小さな穴を作る

そして、次々と本当のことばが目深帽子の口から飛び出した

「何故・・・何故なんだ・・・！」

「ごめんよ・・・ごめんよ・・・！ 君がこんな思いをする必要は無いのに・・・！」

「っ・・・！」

「はじめてないだね・・・でも・・・泣かないで」

「いいの・・・たとえば、氷となり固まっても。 思いだけは永久に続くから」

その言葉が静寂をつくり、二人を動かした

再びポケットの中で優しさを結ぶ

そして、湖を見つめる

静寂とした中、女の子がうつすらと笑う。

涙をこらえ、苦しさが伝わる表情の目深帽子は強く彼女の手を握った

胸の痛みがどんどん増す。

手をもう一度強く握る。

もう手汗すら出ない。

数え切れない思い出が湖に点滅する。

透き通る天の水。

一歩目を踏み出す。

星が回る

影帽子が飛んでいく

小さく波打つ湖。

揺れた二人分のくぼみ。

手から体中へと走る、暖かさ

目を開け、しっかりと彼女の顔を見つめる

口を開けても、もう泡すら浮かばない。

目をゆっくりと閉じようとした時だ。

女の子が口をゆっくり動かした

「あな　た　に　あ　え　て　よ　か　っ　た」

目をゆっくりと閉じ、最期。

三度目の彼女の表情は　．．．．．

波打つ湖が静寂に戻り、陽に照らされ薄氷の膜を作る

二つの影は消え、窓に浮かぶ二つの笑顔も溶けて消えた
そして、薄く出来た薄氷の湖べりにゆっくりと飛び立った影帽子が
落ちた・・・

（後書き）

と、いう事であさきさんの雫でした。

いやー難しい。 解釈がいろいろあるみたいでした・・・。

貴族で身分差で二人は結ばれなかった・・・とか。

今回は一番感情移入しやすいかなーと思う、病気。 とベタな感じ
でいつてみました。

入水しよう・・・と言うまでの肯定はあえて書きませんでした。

面倒くさいとかそういうのじゃなくて（笑

まあ悲しめなこんな感じの短編でした・・・が。 どうでした？ 面
白かったでしたか？

まだまだ未熟ですが・・・これからまたーり小説書いて行きたい
なーと思つてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3363m/>

薄れゆく意識の中で

2010年10月8日23時17分発行